

ダムという名の貯金箱

山添村立山添中学校三年

豊住 奏太

朝、起きて顔を洗う。温かいご飯を食べる。歯を磨く。湯船につかる。そして水を飲む。あまりにも日常的で、一円の価値も意識しないような当たり前の光景だ。しかし、ぼくのそんな「当たり前」を根底から揺さぶる光景を見た。

ぼくはよくダムに自転車をこぎに行くのだが、最近行つたとき、前まで大量にあつた水が半分ぐらいまで減っていたのだ。ひび割れた泥の底が露出した、まるで荒野のような景色だった。水位が下がったことで、今までは少ししか見えなかった砂浜もほとんど姿を現していた。その光景を見た瞬間、前日にジャブジャブと無造作に使った水の感触が、急に申し訳ないものに感じられた。

これまでぼくは、ダムというのを「巨大なコンクリートの壁」くらいにしか思っていなかった。社会の授業で「水資源」や「利水」という

言葉は習ったけれど、それが自分の生活とどう繋がっているのか、実感したことは一度もなかった。しかし、干上がったダムのはばくたちの生活が細い糸一本でかろうじて繋がっていることを突きつけてきた。ダムは、いわゆる村全体の「貯金箱」だ。雨という収入がなければ、貯金はどんどん減っていく。そして今、その貯金が底をつきかけているのだ。

もし、このままダムが空っぽになったらどうなるだろう。ばくは想像してみた。まず、給水制限が始まる。お風呂に入る回数が制限され、トイレを流すのにも気を使うようになるだろう。さらに深刻になれば、農業などにも影響が出る。ばくたちが食べている野菜も、すべては水があることが前提で作られている。水がなくなるということは、単に喉が渇くということ以上に、ばくたちの社会そのものが立ち行かなくなるということなのだ。

そう考えると、自分がこれまでいかに無自覚に水を浪費してきたかに気づかされる。シャワ

ーを浴びているときお湯が温まるまで出しっぱなしにしていた数リットルの水。歯を磨いている間、なんとなく流し続けていた水。それらはすべて、あの干上がったダムから削り取ってきた貴重な「貯金」だったのだ。ぼくたちは、蛇口をひねれば無限に水が湧き出してくると勘違いしているけれど、実際には誰かが管理し、雨が貯まり、それを大切に分け合っているからこそ使える「借り物」のようなものではないだろうか。

もちろん、中学生のぼくが一日に節約できる水の量は、ダムの貯水量から見れば、スプーン一杯にも満たない小さなものかもしれない。でも、だからといって「自分一人がやつても意味がない」と諦めてしまったら、状況はもつと悪くなる。大切なのは、蛇口の向こう側にある景色を想像する力を持つことだと思う。この水がどこから来て、今そこがどんな状態なのか。それを知っているだけで、水を止める指先に少しだけ力がこもるはずだ。

ダムの水の減少を知ってから、ぼくは自分なりに節約という名の貯金を始めた。コップ一杯の水を大切に飲むこと。シャワーをこまめに止めること。そんな小さなことの積み重ねだ。ダムの底が見えるほどの渇水は、ぼくたちに「当たり前前の尊さ」を教えるための警告なのかもしれない。

いつかまた大雨が降って、ダムが満水になつたとしても、ぼくはあの光景を忘れないだろう。水は無限の資源ではない。地球からの借り物だ。次に蛇口をひねるとき、ぼくはその冷たさを感じながら、あのダムの景色を思い浮かべようと思う。一滴の水を大切にすることは、未来を大切にすることなのだから。